

ベートーヴェンへの旅 vol.5

神戸大学大学院教授 / 音楽評論家 藤野 一夫

文化はよい時代にだけ営まれる贅沢ではない

「ベートーヴェンの旅」の連載は後半に入りましたが、新型コロナウイルスの感染拡大で、本チクルス公演の延期が相次いでいることは本当に残念です。コンサートや演劇など、ライブパフォーマンスを通して観客との美的共同体を紡ぐ芸術活動は、「濃厚接触」の恐れが高い「三密」として、早くから自粛を要請されてきました。公演の中止や延期によって、わたしたちは物理的にだけでなく精神的にも閉じ込められています。生の芸術文化に触れることのできない生活が長期化すると、心身ともに健康が蝕まれてゆきましょう。

当たり前にあると思っていたものの大切さに、失われてはじめて気づきます。生活必需品や医療だけではありません。文化も必要不可欠なのです。わたしたちが心の糧としてきた演奏会はどのように成り立っていたのか、気がかりになります。オーケストラをはじめとする実演団体やフリーランスの音楽家たちは、高みをめざして腕を磨いています。スポットライトを浴びる舞台の背後では、マネジメントや技術を担うスタッフが力を合わせている。こうした地道な努力の積み重ねで形成されてきたオーケストラ文化が今、収入源を絶たれて崩壊の危機に瀕しています。日本の公共文化政策の脆弱さが期せずして露呈しました。

他方、ドイツの文化大臣は3月22日に声明を出し、芸術文化を含む零細事業者やフリーランスに対して総額6兆円の給付を約束しました。「文化がいかに大切かという認識は大きく広がっています。社会においても多くの人が文化の大切さを理解しています。文化はよい時代にだけ営まれる贅沢ではありません。社会にとって必要不可欠なものです。芸術家が創造するものは人間性の表現です。わたしたちは今日、このことを以前より以上に必要としています。だからこそ、文化への大きな支援プログラムが必要なのです」。

モニカ・グリュッター文化大臣のリーダーシップに、ドイツの文化関係者は勇気を与えられています。この国では文化や芸術家が大切にされている。だからこそ希望をもって、今できることから取り組んでゆこうという連帯が生まれています。メルケル首相もそうですが、ドイツでは女性政治家の倫理的発言が良心に響くのです。このような緊急事態のときにこそ「詩(芸術)と哲学の国」の本領が発揮されるものと痛感します。



グリュッター文化大臣(中央)と筆者

現代ドイツの文化政策論の中心に「文化的生存配慮」という概念があります。市場原理主義のグローバル化の中で、民営化によって淘汰されてはならない公共文化政策の核心です。誰もが文化的生活を享受できる権利、文化を通して命をケアするという思想です。ドイツ憲法で保障された「人格の自由な発展」を可能にする条件を、芸術の自律性および現代市民社会の民主主義的基盤の形成、という観点から基礎付けたのです。

第7交響曲は自然体がいい

当分ライブで聴けないのは無念ですが、わたし自身が子どもの頃から生きる糧としてきたレコードリストの筆頭はベートーヴェンの第7交響曲です。Vol.2でカミングアウトしたように、クラシック音楽との本格的な出会いとなった大切な曲。小学生のわたしは第7番を聴きながら、まだ見ぬドイツの歴史と社会に思いを馳せ、ベートーヴェン時代の文学や哲学の世界に誘われてゆきました。第7交響曲の魔力はどこにあるのでしょうか。

ベートーヴェンのモットーとされる「苦悩を突き抜けて歓喜に至れ!」。なかでも『運命』は瞬発力が勝負の短距離走。作品構造を的確に聴取するには息を詰めての集中が必要です。けれども第7交響曲に力みは要りません。自然体で感性を開けばよいのです。長い序奏(助走)のうちに森の霊気を蓄えて、ゆっくりとエンジンがかかります。トップギアに入ってから爽快感は喜びの極み。ゆたかなメロディと歯切れのよいリズムに乗って、天馬空を行くように疾走します。この点でカルロス・クライバーは、ウィーン・フィルの柔軟性を昇華した奇跡の名演(1976)を残しています。

第4楽章が閉じる直前、目眩に襲われます。大地震で入江の水が一気に引いてゆき、そのあと巨大津波が襲来するような感覚です。ワーグナーはこの狂喜乱舞を見事に言語化しています。「ハンガリー農民の舞曲によって森羅万象に歌いかける。それに合わせ

て自然が踊り出すのを見たものがいたとすれば、自分は今、途方もなく巨大な渦から新しい惑星が誕生する現場を目撃しているのだ」(『ベートーヴェン』池上訳)。ウィーン・フィルの底力を引き出したシュミット=イッセルシュテットの不朽の名盤(1968)が壮絶無比です。



クライバー



イッセルシュテット

絶対音楽と機会音楽

さて、第7交響曲(1811~12年)はナポレオンの絶頂期に作曲されました。この時期のベートーヴェンは、もちろん皇帝となった独裁者とは敵対関係にあった。政治的に解釈するならば、ナポレオンの専制的抑圧に対するドイツ諸国民の抵抗のエネルギー、すなわち解放戦争の精神が表現された作品と見なすことができます。けれども、一般的に見れば、第7交響曲はカーニバルやバカス祭のような人間讃歌の祝祭です。特定の政治的メッセージを背景に持ちながらも、それを人類にとって普遍的な音楽のドラマへと昇華した作品。その意味では機会音楽ではなく、絶対音楽の典型といってよいでしょう。

創作時のベートーヴェンは、たしかに反ナポレオンの旗幟鮮明なオーストリアの愛国主義者でした。しかし作曲の渦中で、旧体制の打破をめざすナポレオンの英雄精神を改めて想起していたのではないのでしょうか。いまやナポレオン軍からの解放を求めるドイツ国民のパワーは、かつてのナポレオンの精神と不思議に一体化して、音楽の形式に抽象化される。ここでは歴史の事実としては相互に矛盾する立場が、反対の一致にまで高められています。第7交響曲には時代の制約を超える普遍的な生命力が漲っているのです。



テプリッツ風景(撮影著者)

ベートーヴェンは、生涯に2度だけ、しかも1811年と1812年と連続して、ボヘミアの有名な温泉地テプリッツで夏を過ごしています。このうち1811年に宿泊したハーブ館で、様々な作品を書きましたが、第7交響曲のスケッチはこの時期に遡るとされます。また、1812年には「不滅の恋人への手紙」がテプリッツで書かれました。



実は1813年にベートーヴェンは、メトロノームの考案者で知られる発明王メルツェルの依頼で『ウェリントンの勝利』という戦争交響曲を作曲しました。これは特定のイベントのために作られた機会音楽の典型です。もともとヴィトリア会戦でフランス軍を撃破したイギリスの戦勝気分を当て込んで創作されたのですが、その間にライプツィヒ会戦でもドイツ連合軍がナポレオン軍に勝利。12月にウィーン大学講堂で傷病兵のチャリティコンサートとして初演された戦争交響曲は、ベートーヴェンに空前の大成功をもたらします。

イギリス軍とフランス軍の戦闘の様態を図解した大仕掛けの描写音楽に聴衆は熱狂しました。それまで発表機会のなかった第7交響曲は、『ウェリントンの勝利』の前座として、ようやく初演にこぎつけましたが、戦争交響曲の大スペクタクルの前では影が薄かったようです。もとより芸術の質の判定は歴史に委ねるしかありません。



戦争交響曲のポスターですが、真ん中に大きな字で「ウェリントンの勝利」と印刷され、その少し上に小さな活字で1曲目に「新しい大交響曲」として第7が予告されています。まさに前座ですね。

現在、ベートーヴェンの空前の大ヒット作は世紀の駄作とみなされ、演奏機会はほぼ皆無。とはいえ、同じ時代に同じ解放戦争の精神から生まれた両作品、第7交響曲と『ウェリントンの勝利』を聴き比べてみるのも一興でしょう。絶対音楽と描写音楽(機会音楽)の質的・精神的差異を存分に実感できるからです。ベートーヴェンは戦争交響曲と引き換えに、メルツェルから最新の補聴器を手に入れましたが、その代償は高くつきました。

最後に、今回のプログラムの前半に置かれたヴァイオリン協奏曲二長調(1806)の推薦盤を一枚。ダヴィット・オISTRAフのヴァイオリン、アンドレ・クリュイタンス指揮=フランス国立放送管弦楽団が不滅の名盤です。ステレオ初期の1958年録音。その懐の深い、慈愛に満ちたおらかな世界に、子どもの頃からどれほど癒されてきたことか!



オISTRAフ



藤野 一夫 プロフィール

1958年、東京生まれ。神戸大学大学院国際文化学専攻教授。ベルリン自由大学国際高等研究所フェロー。文化経済学会理事、文化政策学会副会長、(公財)びわ湖芸術文化財団理事、(公財)神戸市民文化振興財団理事、日本ワーグナー協会理事他。専門はドイツ哲学・思想史、音楽文化論、文化政策学。近著に「ワーグナー 友人たちへの伝言」(法政大学出版局)、「公共文化施設の公共性」(水曜社)、「地域主権の国 ドイツの文化政策」(美学出版)、「基礎自治体の文化政策」(水曜社)。日経新聞等の音楽批評を担当。